

紅梅の夢

農業を通じ、地域を盛り上げる夢に向かって進む「紅梅夢ファーム」を応援していく気持ちを題字に込めました。

南相馬市小高区の農業法人「紅梅(こうばい)夢ファーム」は東日本大震災と東京電力福島第1原発事故で営農が中断した地域農業の復興を目指し、県オリジナル米「天のつぶ」やコシヒカリ、大豆などを生産している。農業の担い手不足を解消しようと、先端技術を活用したスマート農業の導入や若手農業者の育成にも努める。「古里の農地、景観を守る」。若手社員を中心とする11人の従業員が働く喜びややりがいを感じながら、次世代の農業で地域をけん引している。

震災乗り越え、営農再開

震災と原発事故で小高区の住民約1万3千人は避難を余儀なくされ、避難生活は5年7か月にお

り、担い手不足に拍車をかけた。「震災に負けてなるか」。長年小高区で農業

を続けてきた佐藤社長は、地域の農業を絶やしたくない一心で避難先からたびたび一時帰宅し、2012(平成24)年からコメや大豆の試験・実証栽培に取り組んだ。

避難指示が解除された翌年の2017年1月。佐藤社長らは区内7つの営農組織で同法人を立ち上げた。根強い風評被害を払しょくするため、農作物は生産管理を徹底。コメは全量全袋で放射能検査を行っている。



苦難を乗り越え、166畝の農地で安全・安心な農産物を生産している

約28畝から始まった農地は現在、約166畝まで拡大。コメは農産物認証制度「ふくしま県GAP(FGAP)」や国内版安全認証「JGAP」を取得し、安心・安全で高品質な農産物を消費者に届けている。



先端技術を搭載したロボットトラクター

スマート農業で効率化

機械導入で負担軽減

同法人では、育ち具合を空撮するための小型無人機(ドローン)やロボットトラクター、200

分の処理能力がある機械を備えたライスセンターなど農業機械を10種類以上導入している。機械を活用することで、栽培

工程がデータ管理され、効率よく業務を進めることができる。また、スマート農業は若い世代に農業に興味を

SNSで情報発信

若者の注目集める

Instagramやホームページを活用した情報発信にも取り組む。若社員が「若者目線」で情報発信し、農業はやり

がいのある産業だと知ってもらおうねらいだ。全国各地から学生らが視察に訪れるほか、励ましのメッセージも届くという。

社員の鈴木ふみかさん(23)は「自分たちを見て農業ってカッコいいと思っ

てほしい」と話す。佐藤社長は今後も若者の採用を進めていく考えで、「農業に関心を持ち、コミュニケーションが好きな人が会社に入ってほしい」と話した。



農業再興への思いを語る佐藤社長

紅梅夢ファーム・佐藤良一社長

小高を元気ある地域へ

「震災で一度農業ができなくなった小高を元通りにしたい」。震災と原発事故を経て、佐藤社長は日々小高区の農業復興に奮闘している。佐藤社長は小高区に生まれ育ち、専業農家の9代目。古里を元気づけ、元の姿に戻したい思いが原動力だ。

今後は、農産物のさらなる消費拡大を目指し、生産者と消費者が交流する場をつくりたいと考える。また、農産物の栽培だけでなく、

新たな6次化商品の開発も進めている。いまだ根強い県産米への風評被害は理解が進みつつあり、消費者から敬遠されることも減った。現在の事業を継続し、数年後には作付面積を約355畝まで拡大することを目指している。

地域には震災後、転入者も増えた。農業を通じて小高を盛り上げていくため、「さまざまな企業と協力して、小高を元気ある地域に戻したい」と意気込んだ。



昨年に導入したライスセンター



私たちが作りました

小形綾音(鎌田小5年) 大竹将勢(富田西小5年) 本田優衣(美山小5年) 森田昊希(桜小6年) 草野圭(桜小6年) 若松優志(平三中1年) 本田結(福島二中2年)